

サラワク州バコン川流域ナカット村の土地利用の 100 年

市川昌広（京都大学大学院人間・環境学研究科）

本発表では、サラワク州ミリ省にあるイバンの人々の村における、入植当時から今日までのおおよそ 100 年間の土地利用や仕事の変遷、およびその背景を概観する。

サラワクの全人口は約 200 万人、多民族が住む中、イバンは人口約 50 万人余りを占める最大民族である。イバンの村は、サラワクのほとんどの河川にみられ、特に中下流域に多く分布している。ナカット村は、バラム川の支流、バコン川の中流にある村である。ミリ・ビントウル道路やランビル国立公園にも接している。

ナカット村は、およそ 1900 年頃に、シブ辺りのイバンの入植者によって開拓が始まった。入植者は、原生林をさかんに切り開き、そこを焼畑や水田に換えていく一方で、バコン川では天然ゴムや籐などの換金林産物の採集をおこなった。その後、1950 年代～1980 年代までは、栽培ゴムや商品米の生産がさかんとなった。1980 年代以降は、住まいをバコン川沿いからミリ・ビントウル道路沿いに移し、そこで、稲作、籐籠の製作、コショウ栽培、果物栽培などをするようになった。それらからの生産物は、道路沿いやミリで売られるようになった。

こういった村びとの土地利用や仕事の変遷の背景には、政府の入植政策、換金作物の国際市場での値の変化、コメの地域需要の変化、道路開発、村周辺の町・都市の発展、村周辺の産業の盛衰、華人商人集落の盛衰など村を取り巻く社会・経済の変化があった。ナカットの村びとは、村外の社会・経済と村の生態的環境を取り結ぶ立場にあり、両者を観察しながらときどきの村外の状況に応じて、臨機応変に土や生態的な資源を利用してきた。